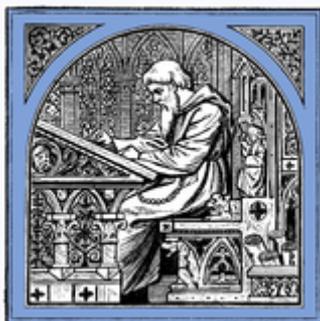


# 月刊ポピュラーサイエンス/第23 巻/1883年6月号/ダーウィンとコペル ニクス



2024年9月1日にウィキソースから書き出されました。

## ダーウィンとコペルニクス<sup>[1]</sup>

この一年、自然科学が被った死による損失は、異常に大きい。豊饒で独創的な数学者は、最も有名な数学雑誌の出版者として、一世代以上にわたってフランスの科学者の中で主導的な地位を占め、化学者は、最初の有機合成によって生命エネルギーの幻想を払拭するのに貢献し、生理学者は、人類の最も古い問題の一つを解決した-これらの人物の死によって空白は簡単に埋められるものではない。しかし、リュービル、ヴェーラー、ビショフなどの名前も、このリストの最初の人物であるチャールズ・ダーウィンの名前に比べれば、その輝きは微々たるものでしかない。現存するほとんどすべての学究的な学会が、彼の喪失を公に嘆き悲しんでいる。本学会では、これまでそのような適切な機会がなかったので、彼の死について正式に言及した上で、この人物の偉大さと、彼のために科学が被った損失について、我々も理解していることを示すために、一言付け加える必要がある。

ダーウィンについて何か新しいことを語るには、時間の経過と科学の進歩によって新しい視点が切り開かれる必要がある。

ダーウィンは、有機世界のコペルニクスのような存在だと思ふ。16世紀、コペルニクスは天動説を廃止して人間中心主義に終止符を打ち、私たちの地球を取るに足らない惑星に格上げした。コペルニクスは、天球の7つ先には天の軍勢が住むとされる「エンピレオ」が存在しないことを証明した。

しかし、人間は依然として他の有為の存在から隔絶していた。100年後、デカルトは依然として人間だけに魂があり、獣は単なるオートマタに過ぎないとした。リネウスの時代から博物学者があらゆる努力をしてきたにもかかわらず、またキュヴィエが消滅した属や種を復活させたにもかかわらず、52年前にはほとんど普遍的だった生物の起源と相互依存の理論は、恣意性、人工性、不条理において、有名なエピシクルズの理論に匹敵するだけだった。カスティエーリのアルフォンソは、「神が世界を創造したときに私のアドバイスを求めていたら、もっとうまく事を運べただろう」と絶賛している。

"Afflavit Darwinus et dissipata est"は、上記の説を示唆しており、「種の起源」を記念するメダルにふさわしい碑文であろう。そして、有機的な適性は機械的なプロセスに取って代わられ、自然淘汰とみなされるよう

になり、人間は初めて同胞の先頭に立つことになった。

コペルニクスのボローニャでの学生時代とダーウィンのビーグル号での航海、フラネンブルグでの隠遁生活とダーウィンのケンチッシュの家での生活、ウォレス氏の研究の出現が彼に長い沈黙を破らせたときまでを比較することができるだろう。ここで、ダーウィンにとっては嬉しいことに、この並列は終わっている。ダーウィンの場合は、多くの状況が重なって、彼の仕事を容易にし、最終的な勝利を確実なものにしたのである。植物学、動物学、形態学、進化論、動植物の地理的分布の研究は、それらから一般的な結論を導き出すのに十分なほど進んでいた。ライエルの健全な感覚は、地質学を醜くした仮説から解放し、科学に均一の考えを導入した。エネルギー保存の学説は、新しい基礎の上に置かれ、天文学的観測と結びついて、宇宙の歴史と持続期間についてまったく新しい見解を生み出すように拡張された。生命エネルギーに関する学説は、より詳細な調査によって説得力がないことが証明された。数年前の異常な乾季に、スイスの湖の底にいわゆる湖水居住が発見され、先史時代の研究は急速に拡大、発展していった。しかし、原始人の存在が明らかになったことで、人類と原始人との間に、また人類とその共通の祖先との間に、長い間待ち望まれていたつながりが生まれたと考えるのが妥当であろう。一言で言えば、「人間降臨論」が出版される時期が来たのだ。だからこそ、人間の本性に関する意見は、それが補完するコペルニクスの体系がプトレマイオスの体系

と異なるように、それまでのすべての意見と完全に異なっており、すぐに一般に受け入れられやすいのである。

コペルニクスの運命はいかに違っていたことだろう。ポツゲンドルフによれば、「コペルニクスは、科学という大空に輝く星であり、これからもそうであり続けるだろうが、彼は地平線がほとんど無知の霧に覆われていた時代に現れた。…天動説はあまりにも古く、あまりにも崇拜されていたため、簡単に崩すことはできなかったのである。」と評されている。コペルニクスの教えは、出版後50年間はほとんど評価されず、ティコ・ブラーエでさえ反対した。したがって、ルターがこれを拒否し、ジョルダノー・ブルーノがこれを唱えたために火あぶりにされて死に、それほど強固ではなかったガリレオがこれを放棄することを強いられたとしても、ほとんど驚くには当たらないだろう。

我々の思索的哲学者たちが、進歩に対して何も貢献しないことを理由にすべての進歩を否定する悲観論にもかかわらず、ダーウィンの運命は、天文学の偉大な改革者の運命よりも幸せだったのである。コペルニクスは、何年も前に完成していたにもかかわらず、それをすぐに出版する勇気がなかったために、死の床に横たわっているときに、自分の著作物の最初の印刷物を見て目を楽ませることしかできなかったが、ダーウィンは、四半世紀近くもその姿を残していたのである。彼は、その出現が最初に引き起こした激しい闘争を目撃し、それがますます受け入れられ、最終的に勝利を

収め、最後まで明るく活動的だった彼は、一連の素晴らしい著作によってそれに大きく貢献することになった。

異端審問によってコペルニクスの信奉者達が火と剣で迫害された一方、チャールズ・ダーウィンはウェストミンスター寺院に、ニュートンやファラデーといった同輩に混じって埋葬されている。

## 脚注

### 1. [↑](#)ベルリン科学アカデミーの記念行事での演説



この作品は1929年1月1日より前に発行され、かつ著作者の没後（団体著作物にあっては公表後又は創作後）100年以上経過しているため、全ての国や地域で[パブリックドメイン](#)の状態にあります。



原文の著作権・ライセンスは別添タグの通りですが、訳文は[クリエイティブ・コモンズ表示-継承ライセンス](#)のもとで利用できます。追加の条件が適用される場合があります。詳細については[利用規約](#)を参照してください。

# About this digital edition

This e-book comes from the online library [Wikisource](#)<sup>[1]</sup>. This multilingual digital library, built by volunteers, is committed to developing a free accessible collection of publications of every kind: novels, poems, magazines, letters...

We distribute our books for free, starting from works not copyrighted or published under a free license. You are free to use our e-books for any purpose (including commercial exploitation), under the terms of the [Creative Commons Attribution-ShareAlike 3.0 Unported](#)<sup>[2]</sup> license or, at your choice, those of the [GNU FDL](#)<sup>[3]</sup>.

Wikisource is constantly looking for new members. During the realization of this book, it's possible that we made some errors. You can report them at [this page](#)<sup>[4]</sup>.

The following users contributed to this book:

- 小棕素
- Kwj2772
- Rocket000
- Jdx
- Santoposmoderno

- Boris23
- KABALINI
- Bromskloss
- Tene~commonswiki
- AzaToth
- Bender235
- PatríciaR
- Dbenbenn

- 
1. [↑ https://wikisource.org](https://wikisource.org)
  2. [↑ https://www.creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0](https://www.creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0)
  3. [↑ https://www.gnu.org/copyleft/fdl.html](https://www.gnu.org/copyleft/fdl.html)
  4. [↑ https://wikisource.org/wiki/Wikisource:Scriptorium](https://wikisource.org/wiki/Wikisource:Scriptorium)